地域史を考える

社会科教育講座・川岡勉

受講者は，学校教育実践コース(社会科教育)10 名，人間社会デザインコース５名の他，教育心理学１名,英語教育１名の合計 17 名で，１名の４回生が混じっていたが，あとは３回生であった。

シラバスでは「日本史の諸問題」という一般的な題目を掲げて内容を示していたが，シラバス掲示後に刊行された書物（山内譲編『古代・中世伊予の人と地域』伊予史談会，2010 年４月１日刊行）をテキストに選ぶことにしたため，シラバスとずれる授業内容となってしまった。この点は，最初の授業において謝罪・説明し，それを了解の上で受講するように求めた。

授業内容を差し替えることにしたのは，日本史Ⅰ・日本史Ⅱを受講し，教育実習を体験した学生たちにとって，前掲の書物を使用し地域史にしぼった授業を展開する方が段階的な学習としてふさわしいと判断したからである。

授業は日本の古代・中世史の流れを地域社会の動きと結びつけて理解させることを目的とし，(1)瀬戸内海・伊予を舞台に展開した地域の歴史に関する基礎的な知識を獲得する，(2)地域史を他の地域や国家・世界との関わりにおいて捉える視点を獲得する，(3)地域の歴史を踏まえて，これからの地域のあり方や改革の方向について，自分の考えをまとめ論述する力を身につける，という到達目標を設定した。

授業の構成は，次のとおりである。

1　地域史の重視と歴史教育
2　地域社会の形成と文京遺跡
3　熟田津と久米官衙遺跡群
4　遣唐使越智貞原の軌跡
5　藤原純友の視線
6　河野通有の実像
7　一遍の風景
8　忽那氏の海上支配
9　海賊衆村上通康と河野氏
10　金子元宅と戦国期の地域社会
11　中世伊予地域史料の研究
12～14　研究発表

授業の進め方として，最初に地域史とは何かを説明し，地域史の重要性や地域史を捉える視座について講義を行なった。次に伊予の古代史に関わるテーマを取り上げて２回講義をした後，４～11 回の授業をテキストを用いた発表と討議の時間に充てた。受講生には，あらかじめテキストを読んでくることを課し，感想・意見・質問を書いた紙を授業後に提出することを求めて，発表を担当しない学生も事前の準備をして授業に臨むようにさせた。また，テキストの内容を深めるために，適宜，必要な資料を掲載したプリント類を配布した。最後の３回は，各自が住んでいる地域や関心ある地域について調べて,研究発表を行なう時間とした。学生たちは，高松の歩みとこれから，草戸千軒町遺跡からみる中世の人々の暮らし，別子銅山の歩み，宇和島藩と伊達宗城など，それぞれテーマを見つけて地域史を調べ，自分で撮影した写真を紹介するなど，工夫をこらした発表を行なった。 最後にレポートを提出させ，授業中の態度や研究発表などを加味して成績評価を行なった。

アンケートをとって，授業改善に向けて意見を聴取したところ，授業の良好な雰囲気が保たれていた（５段階評価で 4.88)，受講したことは有意義であった（4.75)，発表や質問の機会が与えられていた（4.75)，などの項目の評価が高かった。評価が最も低かったのは，授業のレベルが適当であったか（3.62）という項目で，少し難しかったと回答した学生もいた。

地域史というテーマ自体が学生に興味を抱かせたようで，身近でありながら知らないことが多く発見があった，一体自分は 20 年間何をしてきたのだろうと情けなくなったと書いた学生もいた。今回の授業を通じて地域史の面白さを伝えることはできたと思われる。研究発表の形式を取り入れたのも好評で，意欲的に取り組むことができたようである。

シラバスとずれる内容になってしまったのは反省材料であり，今後はできるだけこのような事態に陥るのは避けたいと考えている。